

第1回皇學館大学 地(知)の拠点整備事業 公開シンポジウム報告書

—伊勢志摩で共に暮らし続けることのミライを考えあうシンポジウム—

1. 概要

日時	平成27年9月4日(金) 13:30~17:00
場所	皇學館大学 621 教室 (6号館2階)
プログラム	<p>I部 (13:30~14:00) セレモニー</p> <p>学長挨拶 皇學館大学学長 清水 潔 COC 概要および進捗説明 皇學館大学教育開発センター長 齋藤 平</p> <p>II部 (14:00~16:00) シンポジウム (フューチャーセッション)</p> <p>※登壇者等については、p.3 参照</p> <p>III部 (16:00~17:00) パネル交流会 (学生や地域団体による活動紹介)</p> <p>※ブース出展団体については、p.6 参照</p>
参加人数	86名(登壇者を除く) ※属性については参加者アンケート参照(p.9~13)
配布資料	プログラム、登壇者リスト、アンケート用紙、コメントカード 『伊勢志摩定住自立圏共生学』パンフレット、 『伊勢志摩定住自立圏共生学』パンフレット(学生向け すぐろく)、 皇學館大学 COC 事業報告書 Vol.1
物販協力	コーヒー、ドーナツ販売 (Café quark:三重県伊勢市上地町 696-2)
取材報道機関 (敬称略)	三重テレビ、読売新聞、中日新聞、伊勢新聞

2. 各セッション内容

I部 セレモニー

■学長挨拶 (皇學館大学学長 清水 潔)

本学が位置する伊勢志摩地方は恵まれた自然環境にあり、歴史、文化、観光的資源にも恵まれています。足元には人口減少、少子高齢化の波がひたひたと近づいてきています。地域にある大学として地域の課題を直視し、これを解決するためにあるいは少しでも和らげるためにいかなる貢献ができるかを真剣に考えて、『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムを立ち上げ、昨年文部科学省からCOE推進事業地(知)の拠点推進事業の一つとして採択された次第であります。皇學館大学はこれから地域の発展



あるいは振興に責任と使命を感じて大学の展開を考えて行かなければならないと考えています。

今日は皇學館 COC 事業として初めてシンポジウムを開催します。高校生、大学生という若い人たちが前例にとらわれない、あるいは自治体の若い職員の方々が自由な発想でこの地域の未来を考える、それが今日のシンポジウムの趣旨であります。この地域の未来、明るい希望が見えてくるという第一歩となれば大変ありがたいと思っています。今日はそれぞれのお立場でお忙しい中をお集まりいただきましたことに感謝申し上げ、開会の挨拶と致します。

■COC 概要および進捗状況説明 (皇學館大学教育開発センター長 齋藤 平)

・事業テーマ・連携自治体

皇學館大学の COC 事業は「『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムによる人材育成」を事業テーマとし、伊勢志摩定住自立圏共生ビジョンを形成する 3 市 5 町（伊勢市、鳥羽市、志摩市、玉城町、度会町、大紀町、南伊勢町、明和町）と連携して取組を行っています。

・到達目標

地域の定住機能の新たなあり方を自らの課題として捉え行動できる人材を「アクティブ・シチズン」と位置づけ、生涯にわたってさまざまな課題に直面した時、その課題に臆することなく果敢に挑戦した自ら積極的に課題解決に参画できる、そういう人材を育成することを目指しています。

・学修を支える仕組み

COC 実施本部、運営会議を設置し、学内組織としては学生が COC 事業の取組をする中で拠点とする場所として地域課題学修支援室を新たに設置しました。この支援室に専任スタッフとして 3 名の教員を新たに迎え、事務職員を配置しました。

・教育プログラムの工程

～第 1 段階「地域の資源・課題を知る」～

平成 27 年度春学期に共生学 I の授業を連携自治体職員のみなさまによる講義を中心に展開しましたが、この授業を進めていく中で、大学教育における授業方法の改善に取り組んでおります。

～第 2 段階「資源活用・課題解決の方法を学ぶ」～

1, 2, 3 次産業基本論を学びます。特に第 1 次産業については伊勢志摩圏域では非常に重要な産業となっていますので、6 次化を図っていくにはどのようにすればよいか、その方法を学ぶことを第 2 段階のステップとしています。

～第 3 段階「実践的に課題解決の方法を提案する」～

実践的に課題解決の方法を自らが考え、学生がそれぞれの専門分野を活かしながら進めていきます。ここが本学の COC プログラムの 1 つの肝となる部分で、全く自分とは関係ない課題解決の方法、あるいは自分が興味関心を持って学ぼうとすることと乖離したことを提案してもそれは決して身になるものではない。自分自身が学んでいることをどのように社会に活かして行けるかを考えさせることを眼目に従来の卒業研究にかわるものとして、プロジェクト研究 I・II を行って行くことにしています。

～CLL 活動、地域インターンシップ～

CLL 活動は Community Learning Labo の略称で、皇學館大学の学生が、各自設定した伊勢志摩圏



域（3市5町）内のフィールドで、圏域の課題に取り組む活動の総称です。また、来年度から始まる地域インターンシップは2泊3日程度の期間を設けてインターンシップを行っていくものです。

・授業改善の取組・学修成果アンケート

ポートフォリオによる学修記録の蓄積、クリッカーの使用、ルービック評価方法の導入、Facebookによる授業公開といった新しい授業改善に取り組んでいます。

また、春学期に実施した共生学Ⅰを受講した学生へのアンケートから、学びの広がりや掘り下げがうかがえる結果が得られており、授業が評価されたものと受け取っています。

・今後の重点的な取組

CLL活動などアクティブラーニングの推進、6次化の実践的な取組や地域の課題に対する建設的な議論、それに対する提言を学生たちの学びの中からできないかということへの取組、地域インターンシップの効果的な学修方法の開発・実践、FDへの活用に取り組んでゆきたいと考えています。

Ⅱ部 シンポジウム（フューチャーセッション）

【登壇者】

*高校生（2名） 東端 咲恵さん（宇治山田商業高校） 中山 莉奈さん（宇治山田商業高校）

*大学生（4名） 桑山 采さん（三重大学生物資源学部）
清水 梨央さん（三重大学生物資源学部）
茂谷 大暉さん（皇學館大学現代日本社会学部）
岡野 雄弥さん（皇學館大学現代日本社会学部）

*伊勢志摩圏域市町若手職員（8名）

森田 晃司氏（伊勢市役所）	中村 風太氏（鳥羽市役所）
逢阪 貴雅氏（志摩市役所）	野口 枝里子氏（玉城町役場）
加藤 朋子氏（度会町役場）	中川 大輝氏（大紀町役場）
羽根 俊介氏（南伊勢町役場）	霜 幸佑氏（明和町役場）

【コメンテーター】

近藤 玲介（教育開発センター准教授） 千田 良仁（教育開発センター准教授）
岸川 政之（現代日本社会学部教授）

【ファシリテーター】

板井 正斉（教育開発センター准教授） 池山 敦（教育開発センター助教）

ファシリテーター役の板井准教授、池山助教より本日のシンポジウムの趣旨（目的）、クリッカー（EduClick：参加型授業支援ツールリモコン型レスポンスアナライザ）やコメントカードを使用したシンポジウム進行方法の説明、登壇者の紹介が行われ、その後3つのテーマごとにディスカッションが進められた。

（シンポジウムの目的）

大人も若者もお互いの考えていることを知ること、どれが正解だということではなく、それぞれ



が少しずつ変わる。

■テーマ1. あなたのまちの魅力ってなに？

はじめに「まちの魅力ってなに？」という問いに対して登壇者から「食」、「景色」、「人柄」、「島」、「伝統文化」などの意見が出され、その後、フロア参加者が共感する「まちの魅力」がクリッカーを用いて示された。



1. 人柄	26.1 %
2. 景色	20.3 %
3. 食べ物	21.7 %
4. 島	8.7 %
5. 伝統文化	18.8 %
6. その他	4.3 %

コメンテーター(近藤准教授)から伊勢志摩地域の魅力と感ずる事柄の多くは昔から住んでいる人、外から見ている人共通して感ずることだと

思う。魅力として歴史文化や豊かな自然を挙げられることが多いが、自然の特殊性をしっかりと地域の人たちと共有しておくべきである。また魅力としての自然が一方で課題でもあり、それらと正しく向き合う、正しく理解していくことも必要ではないか。

北側の急峻な山々、南側の低平な砂浜とコントラストのある自然景観の両方をこの地域で楽しむことができ、それに伴って自然の恵みも異なってくる。

自然という視点から見ると「まちの魅力」と考えられる、人柄や食べ物、伝統文化とトータルでつながっているのではないかと思う。

<フロア参加者からのコメント>

- ・さまざまな魅力が地学的根拠により説明できることに驚いた。



■テーマ2. 今から10年後、今のまちに住んでいますか？

「今から10年後、今のまちに住んでいますか？」という問いに対して登壇者からは「今のまちに住んでいる」8名、「伊勢志摩3市5町に住んでいる」2名、「日本には住んでいる」3名で、「一度外から伊勢志摩をみてることで新しい発見ができるかもしれない」「一旦は外に出るが10

年後には戻ってきたい」「こどもができたなら伊勢志摩で育てたい」という意見が出された。

高校生の意見としては、「県外に行きたい」と「地元に残りたい」が半々程度。

「県外に行きたい」と思う理由は便利さや刺激を求めて。いったん外に出るが、公務員として戻ってきて地域の活性化の力になりたいと考えている人もいる。

同じ質問に対するフロア参加者の意見は以下のとおり。

1. 今のまちに住んでいる 44.3%
2. 伊勢志摩 3 市 5 町に住んでいる 8.6%
3. 日本には住んでいる 32.9 %
4. 海外に住んでいる 12.9%
5. その他 1.4 %



コメンテーター(千田准教授)から

地元に住みたい、と考えている人が多いなあと感じた。

自分が生まれたところから離れてみて自分の故郷の魅力を確認する意味で、いったん外に出てみるのはありなのかなあ。と感じる。

これから 10 年先、人口減少が起き、いろいろなことが都会に集約されるようになって行くと地方で仕事がない、自分のやりたいことができないとなる。

できることなら地元で生活をしていきたいとなった時、地域の魅力を活かして、雇用されるだけではない暮らし方や生業の仕方が今後増え、働き方もどんどん変わっていくのではないかと思う。逆にそのような生き方を求めて都会から人が来るという流れは、これから 10 年、20 年後可能性としてあるのではないかと思う。

<フロア参加者からのコメント>

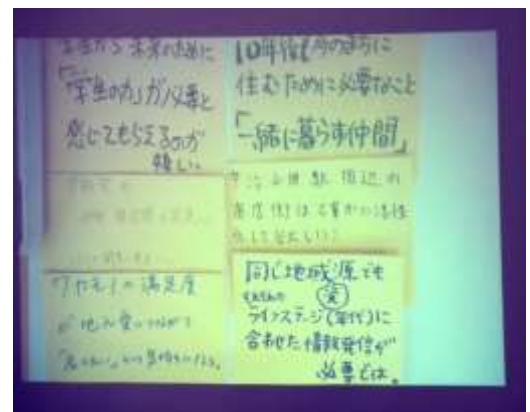
- ・住む場所と人生は密接に関わりあっているのだなあと感じた。
- ・自分の住む場所の魅力をわかって住むことも大事だし、地域の魅力を再発見・新発見して住み直すことも大事かもしれない。

■テーマ3. 10年後も今のまちに住んでいるために必要なことってなに？

「10年後も今の町に住んでいるために必要なことってなに？」という問いに対して学生の登壇者からは「地震、津波対策」、「娯楽・商業施設」、「駅周辺、商店街の活性化」、「学生の力」、「学生がやりたいことを発揮できる場」といった意見が、市町職員登壇者からは「新幹線・空港」、「地元愛、地元のよさを知る」、「地域の仲間」という意見が挙げられた。

同じ質問に対するフロア参加者の意見は以下のとおり

1. 駅周辺の活性化 15.3%
2. 学生の力 8.3%
3. 地元愛 20.0 %
4. 交通整備（新幹線、空港含む） 20.0%
5. 刺激 2.8%
6. 地震、津波対策 9.7%
7. 地域の人との人間関係 11.7%
8. その他 11.7%



コメンテーター(岸川教授)から

イメージがとても大事。

学生の力もとても大事。(学生は未来のオトナである。)

そして地元愛も大事。それには地元(人、物、歴史、文化、産業・・・)をもっと知ってほしいと思う。

消滅自治体などによく言われるが、そうではない。実際そうなるのか? そうなっては困るのである。何故ならば、私たちはここで生きてゆかなければならない。では、どうすればよいか? 人口が減っていく社会の中で「どうしたら自分たちが幸せに生きてゆけるか」を直接的に考えて欲しい。

<フロア参加者からのコメント>

- ・学生の力を必要としてくれていることはうれしい。
- ・地域の仲間の力。
- ・駅周辺を活性化してほしい。
- ・同じ地域資源でもそれぞれのライフステージに合わせた情報発信が必要では?
- ・若者の満足度が地元愛につながるのでは?
- ・若い人が地元でやりたいことができる環境を作るのがオトナの役目ではないか?

■まとめ. このような未来を語り合う場は必要?

1. 必要 95.5%
2. 不要 4.5%

シンポジウムを通じての感想として登壇者からは「年代や立場の異なる人たちの意見を聞くことができてよかった。」「友人たちと未来について語り合う機会を持つことが出来てよかった」「シンポジウム参加にあたり、自分の中でいろいろ考える機会をつくることがよかった」「みんなで地域のために真剣に考えることは良いことだと思う」という感想や意見が出された。

最後に、シンポジウムのまとめとしてファシリテーターから「意見は多様で、若者もいろんなことを考えているのだということフロアの方々にも感じていただけたのではないか。この地域で暮らしていくためにどうしたらよいか、結論が出たわけではないが、いろいろなキーワードが出てきたので、ここから議論が広がっていけばと思う。

また、今後いろいろな機会に若者の意見を受け取っていただければと思う。そのような場をたくさん作り、我々から発信していくということも大事。一緒に考える場を今後も続けられればと思う。

Ⅲ部 パネル交流会(学生や地域団体による活動紹介)

*ブース出展団体一覧

1	CLL活動:伊勢市上下水道部新規啓発冊子作成プロジェクト
2	CLL活動:MOTANI屋『新しい里海創造によるまちづくり』(志摩市)
3	CLL活動:玉城ミュージックモンスターフェスティバル(TMMF)
4	CLL活動:(仮称)皇學館フューチャーセンター
5	三重県立宇治山田商業高等学校課題研究(ネットショップ)
6	皇學館大学地域課題研究会「宇治山田の和紅茶」

7	EPA看護師候補者の日本語教育
8	皇學館大学 おかげキャンパスプロジェクト
9	皇學館大学 地域貢献



伊勢市上下水道部新規
啓発冊子作製プロジェクト



新しい里海創造による
まちづくり『MOTANI 屋』



玉城ミュージック
モンスターフェスティバル



三重県立宇治山田商業高等学校課題研究（ネットショップ）
皇學館大学地域課題研究会「宇治山田の和紅茶」

資料編

1. 参加者アンケート
2. 事前配布チラシ
3. 掲載いただいた新聞記事（一部）

第1回 公開シンポジウム参加者アンケート結果

第1回 公開シンポジウム参加者を調査対象としてアンケート調査を行った。

【実施年月】 平成 27 年 9 月 4 日（金）シンポジウム実施時間中（13:30～17:00）

【実施対象】 アンケート配布数：86 名

有効回答数：60

有効回答率：69.7%

【調査結果】

<属性>

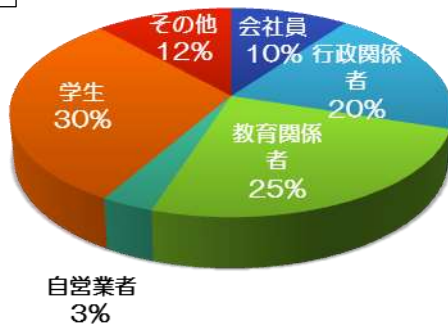
性別



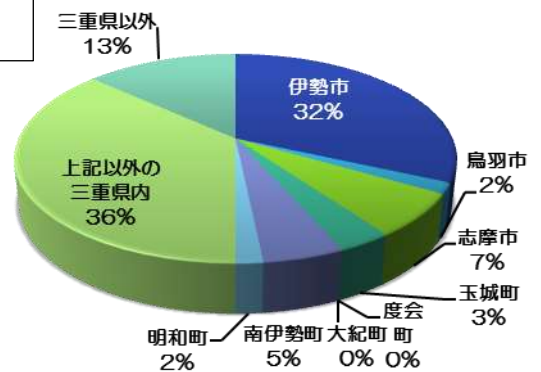
年代



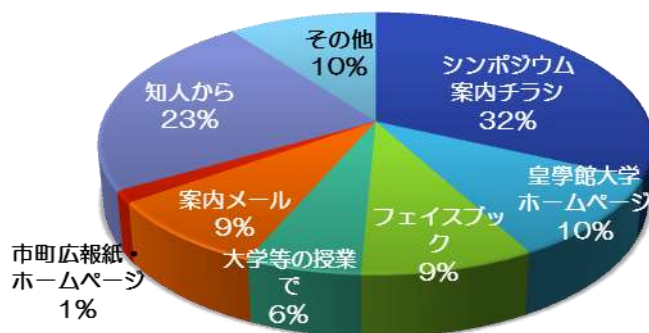
職業



居住地



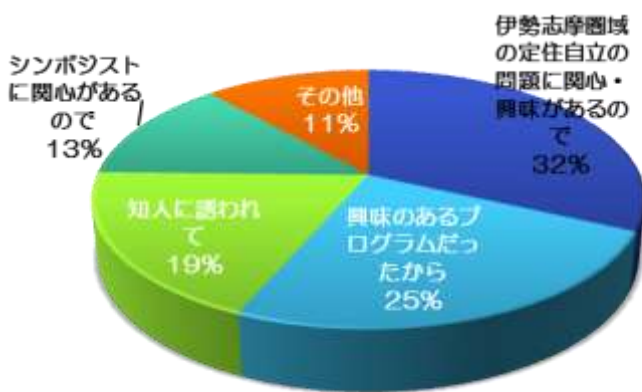
1. 今回のシンポジウムは何を通じてお知りになりましたか。（複数回答可）



<その他回答>

- 本学教員を通じて（2）
- CLL 活動を通じて。

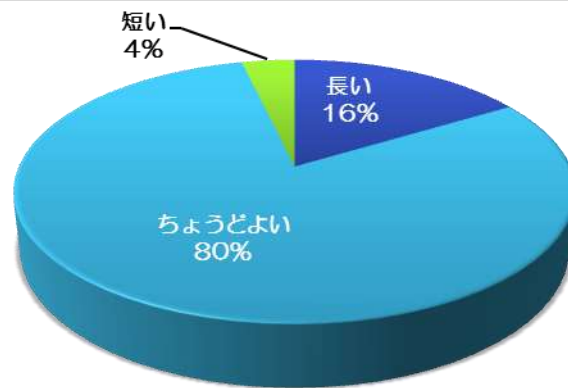
2. 今回のシンポジウムに参加された理由は何ですか(複数回答可)



<その他回答>

- ・研究室メンバーが出ている(2)
- ・同僚が登壇者なので。
- ・南部地域の市町職員が出るので。
- ・地域での取組をどう発信し、まとめれば良いか参考にしたかったため。
- ・同じCOC採択校として取組に興味があったので(2)
- ・学生と若者の意見に興味があったので。
- ・ダブルファシリテーターだったので。

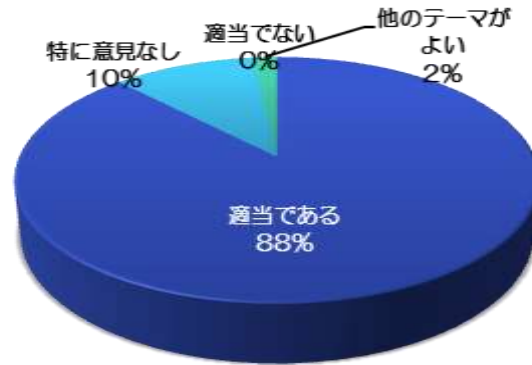
3. 今回のシンポジウムの時間についていかがでしたか。よろしければ、その理由もお聞かせください。



<理由>

- ・もっと深く話し合いをしたかった。
- ・このぐらいの長時間のシンポジウムの催しはいろいろな目新しい意見や話を聞いてよかった。
- ・あらかじめ3題の設問で進めることが示されていましたし、進行がとてもまとまっていたので、あまり長すぎず、短すぎず本当にちょうど良かったと思います。
- ・あっという間に時間が過ぎた。
- ・肯定で進める視点がよく、Ⅲ部に感心した(2)
- ・もう少しトイレ休憩がほしい(3)
- ・二部構成に分けたらもっと濃い内容でできるかなと思う。
- ・疲れる。
- ・少し長いかなと最初は思ったが、自分でも考えを見つめ直すことができる時間になった(2)
- ・ちょうど良いが、パネル交流会の時間を増やしたほうがよいかも。

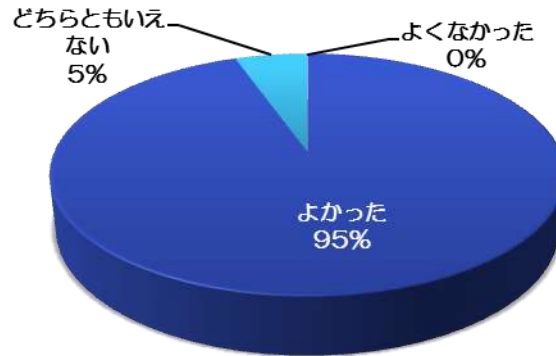
4. 今回のシンポジウムのテーマについていかがでしたか。よろしければ、その理由もお聞かせください。



<理由>

- 地域活性化には一体何が必要なのかをよく話し合うことができた (2)
- 考えやすかった。
- 10年後、この地域に産婦人科がありますように。産まれなければ始まらない!
- 登壇者が楽しそうで良かった (2)
- 若い世代が地元の魅力について見つめなおす良い機会である (2)
- 住 (居場所) について多世代、立場を意識せず、掘り下げていく拡張性が魅力的だった。
- 皇學館の視点が判った。
- プログラムがとてもデザインされていて大変良かった。
- 未来について話し合ったから。世代が違う人が集まる場は必要。
- 同年代の若い世代の率直な意見を聞いて参考になったから (3)
- 旬の話題の「地方創生」とサミット開催決定を受けていいタイミングとテーマではないか (2)
- “住む”という視点
- 地元のよさについて考えることができたから。
- これからの地方の課題に「みんなで考え合う」ということに特に若い視点でというテーマが素晴らしかった。
- 高校生、大学生、行政の若者がこのテーマをどう考えるかを比較できておもしろかった。
- 未来について語り合うことは心が豊かになるような気がする。
- 自分たちが学生時代には考えたこともなかった「地元愛」的な思考を若者に考えてもらういい手法である。
- 今後、さらにテーマを絞ったディスカッションにしてゆくキックオフとして適当だったと考える。
- 社会人を含めて若い人が未来を語る場が南部で行われるのは画期的。面白かったです。
- 他県であっても、三重県の魅力に気づくことができ、かつ、自分の住んでいる地域を考えるきっかけになった。

5. 今回のシンポジウムに参加していかがでしたか。よろしければ、その理由もお聞かせください。



<理由>

- たくさんの人の考えを聞くことができ、地元についてよく考えることができ、いい経験だったと思う (3)
- 自分の住んでいる地域の魅力について考えることができる良い機会だった。
- NHKの番組のようで面白かった。ファシリテーターの先生のテンポがよく、フロアと登壇でまとまっている感じが良かった。
- 通常の一方向的な発表と違い、広聴者も含めた参加型が見やすかった。
- 高校生の意見がとても前向きでしっかりしていて驚いた。
- さまざまな意見を聞くことが出来た (4)
- 若い方のいろいろな視点からの意見があり、新たな気づきもあって素晴らしかったと思う。
- コメンテーターのコメントが良かった。進行がスムーズ。企画が良い。登壇者もよく準備できていた。
- 興味のある内容ではない。
- ターゲット層にあわせた日時設定、プログラム構築があればもっとよかった。
- 久しぶりに若い人の意見をいろいろ聞いてよかった。(4)
- もうちょっと硬いイメージで来たが、ファシリテーターのお二人のおしゃべりが上手く、聞きやすく参加しやすいイベントだった。(2)
- 世代の違う視点をみることができた。
- 皇學館大学の取組を知ることができた。
- 高校生、大学生、自治体若手職員という設定がよかった。
- 若い人たちの意見＝世代間交流につながっている。
- 次回はクリッカーを多用するか、フロアとの意見交換を増やすと良いと思う。
- 若い世代を高校生から社会人まで幅広く、丁寧に様々な意見を引き出して、まとめられたのは見事だった。フロアの意見の示し方も参考になった。
- ともしれば、難しくなりがちなテーマだと思うが、とても判り易く、いろんな気づきがあるシンポジウムだったと思う。
- 機器を使った立体的な運営がよかった (初体験でした)。
- 新鮮でよかった。
- 地元が好きだという気持ちを皆持っているように感じた。
- 他地域から見た地元や三重県を知ることができ、自分の中に新たな価値観ができたと思う。
- 多様な見方がわかった。何もかも満たそうとするのは無理があるかもしれない。この地域として何を大事にしなければならぬかへの焦点化が必要かと思った。

6. その他、今回のシンポジウムについてのご意見・ご要望や今後、定住自立に関する事で取上げてほしいテーマがありましたら、記載してください。

<意見・要望>

- また、このような催しがあるとありがたいです！
- 何か結論を出すのではなく、ずっと同じテーマで開催し続けると面白いと思う。
- 地域で良い体験をし、良い思い出を残す、残してあげることが大切だと思う。
- 若者が定住するために具体的な方策を検討する場（何に取組めばいいのか、など）
- 問3の質問がとても良かった。市民などたくさんの人に来てもらいたいと思った。
- 今回出た意見を実現させてゆかなければならない。自己満足で終わらないように。
- ワークショップスタイルでガンガンいきましょう！
- 大変参考になった。
- 中学生も入れた意見交換、シンポジウムの場があってもいい。
- 学生さんが少ないのが残念（時期？）関係者が多いですね。PRの仕方を考えたいですね。
- 若い人たちがしっかりした考えを持っているのを頼もしく思った。
- 地域活性化に注目した県民および県外出身者の方々のシンポはどうでしょうか。
- 鈴木知事、鈴木伊勢市長に聞いてほしいシンポジウムだった。
- 学生間で自主的に考える姿勢を作る。学生間のディスカッション。
- テーマの中に「共に」や「暮らす」にもっと焦点を当ててみてもおもしろいと思う。
- 地元に住み続けるためには、地元を好きになること（地元愛）が必要。
- 外部の人（県外）も入れて、この地域の魅力をいろいろな視点から話し合っても面白いかも。
（例：うどん県 v s 伊勢うどん）
- オープンキャンパスなどで高校生と市役所、大学生とのセッションなども面白いと思った。

<取上げてほしいテーマ>

- 防災。女性のワークライフバランスづくり。
- 体験的プログラム（一般。特に若者世代や親子参加ができるもの）
- 高齢者社会
- 就労や起業に関するもの



だから伊勢志摩での暮らし方を学んでます

大人やって、
ミライのこと
全部わかつとる
わけやないし。

9/4

文部科学省
地(知)の拠点

第1回 皇學館大学 地(知)の拠点整備事業 合同シンポジウム

伊勢志摩で共に暮らし続けることの
ミライを考えあうシンポジウム

日時
平成27年9月4日(金) 13:30~17:00

場所
皇學館大学 621教室 (6号館 2階)

次世代を担う若者が自らの将来を描くとき
共有すべき地域の課題とは何なのか？

高校生と大学生
そして伊勢志摩圏城市町の若手職員が
「オトナ」には無い感覚で共に考えあいます

教育プログラムによる人材育成

<http://coc.kogakkan-u.ac.jp>

FRI 1330-1700 @627

9/4

日時

平成 27 年 9 月 4 日（金） 13:30～17:00

I 部 13:30～14:00 セレモニー（学長挨拶・COC概要及び進捗説明）

II 部 14:00～16:00 シンポジウム（フューチャーセッション）

【登壇者】

高校生・大学生・伊勢志摩圏城市町若手職員

【コメンター】

近藤玲介（教育開発センター准教授）千田良仁（教育開発センター准教授）

岸川政之（現代日本社会学部教授）

【ファシリテーター】

板井正寿（教育開発センター准教授）泡山敦（教育開発センター助教）

III 部 16:00～17:00 パネル交流会（学生や地域団体による活動紹介）

場所

皇學館大学 621 教室（6 号館 2 階）

〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町 1704 0596-22-8635（企画部 地域連携推進室）

伊勢市駅（JR・近鉄）または宇治山田駅（近鉄）より

内宮行バス（徳古館前経由）または宿禰行バスに乗り、皇學館大学前下車（約 10 分）

徒歩の場合は各駅より約 20 分

※駐車スペースに限りがあります。公共交通機関でのご参加をお願いします。

参加無料・事前申込不要。一般の方もぜひご参加ください。

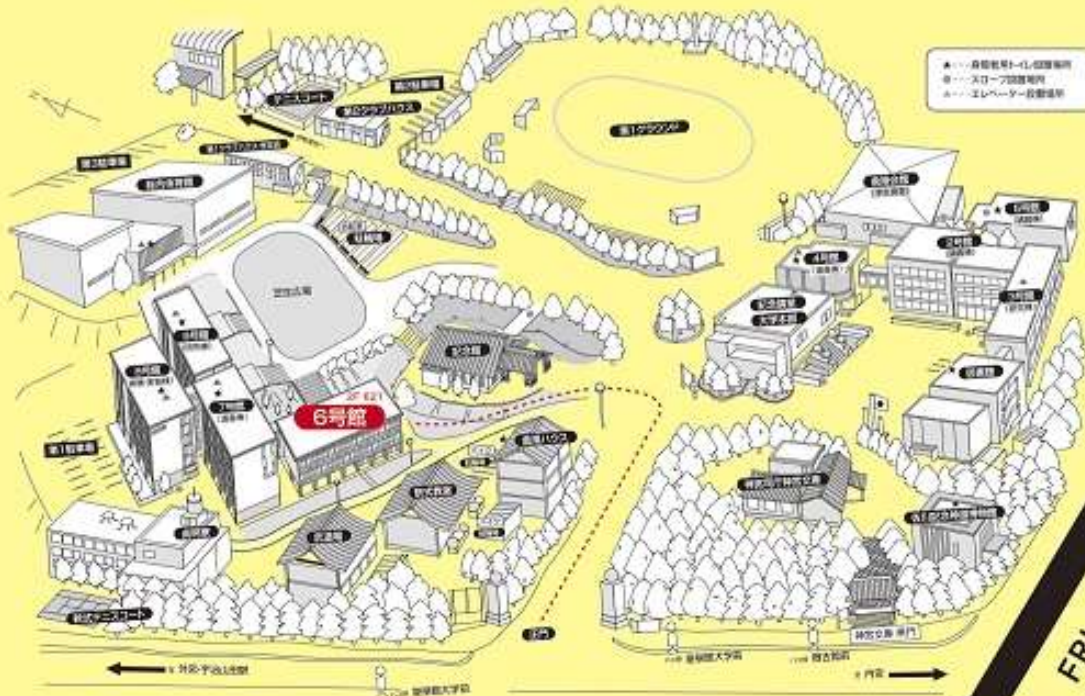


第 1 回 皇學館大学「地(知)の拠点」整備事業 公開シンポジウム

伊勢志摩で共に暮らし続けることのミライを考えあうシンポジウム

次世代を担う若者が自らの将来を描くとき、共有すべき地域の課題とは何なのか？

高校生と大学生、そして伊勢志摩圏城市町の若手職員が「オトナ」には無い感覚で共に考えあいます



FRI 1330-1700 @621

<http://coc.kogakkan-u.ac.jp>